

205201-000-2

41-93

新古今集十人百首

千葉 葛野/撰

[出版事項不明]

EDV-0228



# 新古今集十人百首

千葉 葛野 撰

此集其時代の作者あまたあるが中より十人の人々のおのゝく十首づゝぬき出して、假に新古今集十人百首と名づく、其時代の歌人、太上天皇後鳥羽院、後京極攝政、藤原俊成、藤原有家、藤原家隆、藤原定家、西行、寂蓮、式子内親王、宮内卿等あり。

太上天皇

春のはじめの歌

はのゝくと春こそ空に來にけらしあまのかぐ山かすみたなびく

關路鶯

うぐひすのあけどもいまだふる雪に杉の葉しろしあふさかの山

水郷春望

見わなせば山本かすみ水無瀬河ゆふへはあさとなにおもひけむ

○新古今集十人百首



釋阿和歌所にて九十賀し侍りしをり屏風に山櫻さきたる所を  
さくらさく遠山鳥のしだり尾のちがくし日もあかぬいろかな

大神宮にたてまつりし夏の歌の中に

やまさとの峰のあまぐもどたえしてゆふべすいしさまさの下露

秋の歌の中に

露は袖に物思ふころはさそなおくかならず秋のならひならねど

最勝四天王院の障子に鈴か河かきたる處

すいか河ふかき木の葉に日敷へてやまだが原のしくれをすさく

冬の歌の中に

ふかみどりわらうひかねていかならむまなく時雨のふるの神杉

百首歌の中に

わすらるゝ身をしる袖のむらさめにつれなく山の月は出でけり

新宮にまうづとて熊野河にて

くまの河くだす早瀬のみなれさをさすかみなれぬ波のかよひ路

攝政太政大臣

春たづ心をよみ侍りける

みよしのは山もかすみてしらゆきのふりにし里に春は來にけり

殘春の心を

よしのやま花のふるさとあたたえむなしき枝に春かせぞ吹く

百首歌奉りし時

あすよりの志賀の花のまれにだに誰かはとほむ春のふるさと

おあし時

萩の葉にふけばわらしの秋なるをまちける夜はのさをしかの聲

八月十五夜和歌所歌合に深山の月といふことを

ふかへらぬ外山の庵のねざめだにさそあ木の間の月はさびしき

百首歌奉りし時

さりとくす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねむ

五十首歌奉りし時



みなかみやたえくこはるいひまより清瀧川にのこるしらなみ  
水無瀬にて戀十五首歌合に夕戀といふ心を  
何ゆゑとおもひもいれぬゆふべだにまちてしものを山の端の月  
家の歌合に

いづもさくものどや人のおもふらむこぬゆふぐれの松風のことゑ  
和歌所歌合に關路秋風

ひとすまぬ不破のせきやのいたひさしわれにし後はたゞ秋の風

式子内親王

百首歌奉りし時春の歌

やまふかみ春とも知らぬ松の戸にたえくかゝる雪のたまみづ

百首歌の中に

花はちりろのいろとあくながむればむかしさうらに春雨をふる

齋院に侍りける時神たちにて

わすれぬやあふひを草にひき結びかりねの野への露のあけぼの

百首歌の中に

ゆふだちの雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山に日くらしのことゑ

百首歌奉りし時秋の歌

桐の葉もふみわけ難くなりけりかならず人をまつとなければ

百首歌に

さむしろの夜はのころもてさえく初雪しろしどかのへの松

百首歌奉りしに

ゆく末は今いくよとかいはしろの岡のかやねにまくらむすばむ

百首歌の中に忍戀

玉の緒よたえなばたえねあがらへば忍ぶる事のみわりもみする

百首歌の中に

わすれてはうちあけかるゝ夕べかな我のみ知りてすぐる月日を

題しらす

しるべせよあとなき浪にこぐ船のゆくへも知らぬ八重のしほ風



皇太后宮大夫俊成

日吉社によみて奉りける子日の歌

さゝあみや志賀の積松ふりにけり誰世にひける子の日なるらむ

攝政太政大臣家に五十首歌よみ侍りけるに

またや見ひかたののみのゝさくらがり花の雪ちる春のあけばの

百首歌奉りし時

こまどめてなほ水かはむやまぶきの花の露そふ井出のたまきは

千五百番歌合に

おほる河かゝりさしゆくうかひ船いくせに夏の夜をわかすらむ

崇徳院に百首歌奉りし時

みしふつさうゑし山田にひたはへてまた袖ぬらす秋は來にけり

題しらす

かつこほりかつはくだくる山河のいはまにむせぶあかつきの聲

雨のふる日女につかはしける

おもひわまりあまたのうらをながむれば霞をわけて春雨をよる

崇徳院に百首歌奉りし時戀の歌

おもひわび見し面影はさておきて戀せさりけむをりぞこひしき

入道前關白太政大臣家百首歌よませ侍りけるに立春の心を

年くれしなみだのつらゝどけにけり昔のそでにも春やたつらむ

文治六年女御入内の屏風に臨時祭かける所をよみ侍りける

月さゆるみたらし河にかげ見えてこほりにするやまあむの袖

宮内卿

五十首歌奉りし時

かさくらしなほふる里の雪のうち跡こる見えね春は來にけり

千五百番歌合に春の歌

うすくこく野べのみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ

五十首歌奉りし中に湖玉花

花さそふひらのやま風ふきにけりこぎゆく船のあと見ゆるまで



山家暮春といふ心を

柴の戸をさすや日かげのなむりなく春くれかゝるやまのはの雲  
千五百番歌合に

片枝さすおうのうらなし初秋になりもあらずもかせず身にしむ  
秋の歌とてよみ侍りける

おもふことさしてうれとはなきものを秋のゆふべを心にふとふ  
八月十五夜和歌所歌合に海邊秋月といふことを

心あるをしまのあまのたもどかな月やせれとはぬれぬものから  
雨後月

月をさはずつらむものかむらさめのはれゆく雲のすゑのさと人  
五十首歌奉りし時

からにしき秋のかたみや龍田山ちりあへぬ枝にあらしふくなり  
寄風懸

さくやいかにうはのうらなる風だにもまつに音する習ありとは

藤原家隆朝臣

攝政太政大臣家百首歌合に春曙といふ心をよみ侍りける

かすみたつすゑの松山はのくゞと浪にはなるゝよこぐものうら  
おなじ時野遊の心を

思ふとちりこともしらすゆきくれぬ花の宿かせ野べのうぐひす  
題しらす

いかにせむこぬ夜あまたのはとゝぎすまたしと思へば村籬の空  
守覺法親王五十首歌よませ侍りける時

わけぬるかえろもてさむしすがはらやふしみのさとの秋の初風  
和歌所にてをのこども歌よみ侍りけるに夕鹿をいふことを

下もみぢかつちる山のゆふしぐれぬれてやひと鹿の鳴くらむ  
攝政太政大臣家歌合に湖上冬月

志賀の浦沖とはせかすゆゑ後間より氷りて出づるありわけの月  
五十首歌奉りし時



あけばまたこゆべき山の峰なれやうらゆく月のするのしらくも  
水無顔にて戀十五首歌合に

おもひいる身のみかくさの秋の露たのめしするや木がらしの風

最勝四天王院の障子にあふくま河かきたる所

君が代にあふくま河のうもれ木もこほりのしたに春をまちけり

百首歌奉りし時

瀧のおと松のあらしもなれぬればうちぬるほどの夢は見せけり

藤原有家朝臣

土御門内大臣家に梅香留袖といふことをよみ侍りける

ちりぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖にはるかせぞふく

攝政太政大臣家にて詩歌を合せけるに水邊自涼といふことをよみ侍りける

すゞしさは秋やかへりてはつせ河ふるかはのへの杉のしたかげ

攝政太政大臣家百首歌合に

風わたるあさちがするの露にだにやどりもはてぬ宵のいなづま

同じ家にて所の名を探りて冬歌よませけるに伏見の里の雪を

夢かよふ道さへたえぬくれたけのふしみのさとの雪のしたをれ

旅の心を

ふしわびぬしのゝ小篠のかりまくらはかなの露や一夜ばかりに

石清水の歌合に旅宿嵐といふことを

いはぶねの床にあらしをかたしきてひとりやねなむさよの中山

千五百番歌合に

忘れじといひしばかりのなごりとして其夜の月はめぐり來にけり

土御門内大臣家に山家残雪といふ心をよみ侍りける

やまかけやさらては庭にあともなし春を來にける雪のむらぎえ

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに閑居の心を

誰かはおもひたえても松にのみおとづれてゆく風はうらめし

春日社歌合に松風といへることを

われあがらおもふか物をとばかりに袖にしぐる庭のまつかせ



藤原定家朝臣

守覺法親王五十首歌よませけるに

春の夜の夢のうきはしとだえして峰にわかるよよこぐものうら

おなじ時五十首歌に

霜まよふうらにしはれしかりおねのかへるつばさに春雨をふる

百首歌奉りし時

しらくもの春はかさねてたつたやまをぐらの峰に花にはふらし

おなじ時

こまどめて袖うちばらふかげもあしさをわたり雪の夕ぐれ

攝政太政大臣大納言に侍りける時山家雪といふことをよませ侍りけるに

まつひとのふもとの道はたえぬらむのさばの杉に雪おもるなり

旅の歌とてよめる

たびとどのうでふさかへず秋風に夕日さびしきみねのかけはし

詩を歌に合せ侍りし山路秋行といへる心を

みやこにもいまやころもをうつやま夕霜はらふ菫のしたみち

攝政太政大臣家に百首歌合し侍りけるに祈戀といへる心を

年も経ぬいのるちぎりははつせ山をのへのかねのよその夕ぐれ

戀の歌とてよめる

歸るさのものとや人のながむらむまつ夜ながらのありあけの月

後白河院栖霞寺においしましけるに駒曳の引分の使にてまわりけるに

嵯峨の山千代のふるみちあとどめて又露わくるもちづきのことま

西行法師

春の歌とて

ふりつみしたかねのみ雪とけにけりきよたき河の水のしらなみ

題しらす

とめをかし梅さかりなるわが宿をうときも人ばをりにころよれ

花の歌とて

よしの山去年のしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ



題しらす

道のへの清水流るゝやなぎかげしばしとてこそたちとまりつれ

題しらす

こゝろなき身にもあはれは知られけりしきたつ澤の秋の夕ぐれ

題しらす

秋しのや外山のさとやしぐるらむいこまがたけに雲のかゝれる

題しらす

つのかのなにはの春はゆめなれやあしの枯葉に風わたるあり

東の方にまかまけるにのみ侍りける

年たけてまた越ゆべしとおもひさやいのちなりけりさよの中山

題しらす

今ぞ知るおもひいでよと契りしは忘れむとてのなさけなりけり

題しらす

よしの山やがて出でじとおもふ身を花ちりなばと人やまつらむ

寂蓮法師

攝政太政大臣百首歌合に

今はとてたのむの雁もうちわびぬおぼろづく夜のあけほのゝ空

和歌所にて歌つかうまつりしに春の歌とて

かつらぎやたかまのさくらさきにけり立田のおくにかゝる白雲

千五百番歌合に

おもひたつ鳥は古巢もたのむらむなれぬる花のあとのゆふぐれ

五十首歌奉りし時

くれてゆく春のみなどは知らねどもかすみにおつる宇治の柴船

題しらす

さびしさはうの色としてなかりけりまきたつ山の秋のゆふぐれ

月前秋風

月はなほもらぬ木の間をすみよしのまつをつくして秋風を吹く

入道前關白右大臣に侍りける時家の歌合に雪をよめる



ふりろむる今朝だに人のまたれつる深山のさとの雪のゆふぐれ  
土御門内大臣家にて海邊歳暮といへる心を

おいの浪をえける身ころあはれなれことしも今はすゑのまつ山  
八月十五夜和歌所歌合に月多秋友といふことをよみ侍りし  
たかさごの松もひかしにありぬべしなほゆくするは秋の夜の月

建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を  
うらみわび燕たじ今はの身なれどもおもひなれにし夕暮のうら

京極の卿、嵯峨の山莊にて、百首の色紙かき給ひしが、始にて、後には、あるは委繪  
書加へて一卷となし、あるはもと未わかちて歌牌となして、兒女子のもてあそ  
びぐさとなりしより、新百首、女百首、法師百首、つぎくゝに出來にしを、こた  
び我朋樞圖のあるは千葉翁、世々の集の中にも、わきて新古今集は、ひときはす  
ぐれて心詞めづらしく、姿しらべ花やきたるが多かる中に、えらびに撰びて十  
人の人々のを、各十歌づゝ抜とりて百首として一卷とせられしは、かの兒女子  
のもてあそびならんやは、歌よまん人の常に懐はなたぬ守り月とひとしく、ひ  
めもたるべきものにあんあるべき。

嘉永三年の春

八十三翁 齋藤彦麿

41

93



